

# アウグスティヌスの比喩的解釈について

—SIMILITUDO (*De Doctrina*

*Christiana*, II, 6, 7-8) をめぐって—

加 藤 武

## 序 説

初期のアウグスティヌスには直観主義がある。しかし直観主義の峻しき、路無きに行きなやんだアウグスティヌスはやがて迂回の路をとる。解釈と愛の二重超越<sup>(1)</sup>という迂路である。この解釈の場として比喩が登場する<sup>(2)</sup>。

後期において比喩的解釈を離れ字義的解釈に戻った、と人は言う。それでは字義的とは何か<sup>(3)</sup>。比喩の限界を悟って再び直観主義の道に回帰したのであろうか。迂路は文字通り迂遠の路であったのか。否。比喩の解釈という迂路を踏えて、道が開ける。

それではこのような迂路において成立する解釈の場としての比喩とは何か。

それをたずねるのが本論文の課題である。後期における字義的解釈についてはここではふれない。

## 1 比喩の役割

同一の事態を、比喩を借りて表現することも、比喩を用いずに表現することもできる。では比喩的表現を用いることによって果して新しい事態が生起するのであろうか。生起するとすれば、いかなる差異が生起するのであろうか。

アウグスティヌスは *De Doctrina Christiana*, II, 6,7-8 においてこの問いを立てている。

Dentes tui quae grex detonsarum, ascendens de lavacro, quae omnes geminos creant, et non est sterilis in eis?

「なんちの齒は毛を<sup>き</sup>剪りたる牝羊の<sup>あらいば</sup>浴場より出でたるが如し、おのおの雙子をうみて一つも子なきものはなし」 雅歌 4, 2 (文語訳による) という雅歌の一節を、教会に洗礼を受けて新しく加えられるキリスト教徒の生活への指針を示すための比喩(similitudo)と解し、このような比喩的表現を用いることによって、言われている事柄(res)はすこしも変わらないのに、なぜ耳に心地よくひびくのか、と問う。それは耳に心地よくひびくのみではない。アウグスティヌスは比喩の効果を三つ挙げている。

- 1) 「比喩によってどんなことも心地よく知られる<sup>(4)</sup>」。
- 2) 「なんらかの困難を伴って探求されると、発見の魅力は一層増し加わ<sup>(5)</sup>る」。
- 3) 「こうした不明瞭さと多義性とは、すべて労苦(解釈という)をはらうことによって、傲慢を矯正し、知性を倦怠感から取り戻すようにと、神が配慮されたものだ<sup>(6)</sup>ということを疑う余地はない」。

それでは比喩の与える三つの効果、心理的快、発見の知的魅力、傲慢の倫理的矯正とは比喩の任務のすべてを言い尽しているであろうか。

Jean Pépin は “St. Augustin et la fonction protréptique de l’allégorie” において、アウグスティヌスの著作全体に見られる比喩の役割を調査し七<sup>(7)</sup>つに分類した。

- 1) アレゴリーは真理を新鮮な気持で受取らせる。
- 2) アレゴリーは初心者が安易に真理に接近することを拒絶する。
- 3) アレゴリーは万人が真理に接近するための道を拓く。
- 4) アレゴリーは真理に対する倦怠感を取り除く。
- 5) アレゴリーは真理に向う意欲をそそる。

6) アレゴリーは真理の探求に向けて、精神を鍛える。

7) アレゴリーは真理の発見を飾る。

以上の分類には矛盾するように見えるものや重複するものも含まれているが、アウグスティヌスがさきに挙げた三つの効果がここに含まれることは確かである。さらにこのようなアレゴリーの使用はキリスト教教父や世俗神学の長い伝統に連なるものである。このように見てくるなら、*De Doctrina Christiana*, II, 6, 7-8 でのアウグスティヌスの回答には別段とりたてて言うべきものをもたないように見える。それは真理に向うための精神の予備的運動として *exercitatio animi* の役割を担うものであり、その意味で伝統に定位するものであった。<sup>(8)</sup>

一体アウグスティヌスの提起した問いは、このような表面的な解答によって済ませることができるのであろうか。否である。われわれはむしろアウグスティヌスと共に問わねばならない。アウグスティヌスのテキストを立て直すことを通して、問いに根本的な解答への道を備えたくねがう。

## 2 表わす比喩

比喩的な思惟がアウグスティヌスにおいて登場するのはいつか。さらにいかにしてか。まずこの問いから始めよう。人は修辞学に養われかつその分野で早くから頭角を現わしたからには、比喩的思索はその甫めから現われていた、と言うかも知れない。しかし哲学者としての思想に決定的な意義を帯びるのは、私の見るところ 388-9 年に属する。

しかしこの仮説についても人は反論するであろう。アウグスティヌスは 386 年、ミラノにおいて司教アンブロシウスの説教を聴聞し、その「比喩的・霊的解釈」にふれることによって目から鱗の落ちるように開眼したのではなかったか、と問うであろうし、その問いは当然と言える。<sup>(9)</sup>

「またアンブロシウスが、民衆への説教の中でしばしば『文字は殺し、霊は生かす』ということばを利用し、聖書解釈の基準として、たいへん

すずめるのをうれしく聞きました。彼は文字通りにとればよこしまなことを教えているように見えることを、その神秘のおおいをとりさり霊的な意味を開示してくれましたが、そのさい、私の気にさわることは何一つ言いませんでした。<sup>(10)</sup>」

たしかにマニ教徒の世界像から離脱するに当ってアンブロシウスの聖書解釈の方法がアウグスティヌスに大きな影響を及ぼしたことを正しく評価しなければならない。けれどもその影響は「徐々に」(paulatim)<sup>(11)</sup>、地下水のように浸透していったことも同時に見通してはならない。

カッシアクムの著作群に表われる比喩的表現は次の二種類に大別できよう。一つは詩的形象によるものであって、他は数学的な、とりわけて幾何学的図形によるものである。<sup>(12)</sup>

「(アリピウスは言った。)『彼らはまた、ちょうど鏡に映されたようにあのプロテウスという姿に映された彼らの像に注意せよというのです。というのは、プロテウスは捕えようとしても捕えられず、何かある神霊が教えなければ、プロテウスを探す人の目には決して同一の姿のままでは映じないと思われているからです。……』<sup>(13)</sup>」

アウグスティヌスはこの発言についてこう言っている。

「……というのは、あのプロテウス(きみがあのプロテウスに言及したとは、何という精神の高さ、また哲学の最もすぐれたものへの何という注意力であろう!)きみはそのプロテウスを真理の象徴として導入したからである。これをみれば、きみたち若い人々は、哲学は必ずしも詩人を完全には軽視してはいないということがわかるはずだがね。プロテウスは詩においては一貫して真理の役割を演じているのだ、とわたしは言おう。つまり虚偽の姿像で欺かれ、プロテウスを捕える結び目をゆるめたりほどいたりすると、だれもその役割を見抜くことができないというわけだ。<sup>(14)</sup>……」 *Contra Academicos*, III, 5, 11; III, 6, 13.

プロテウスを *imago Veritatis* として用いたとき、この比喩的表現を当

時愛読してやまなかつたヴェルギリウスの *Georgica* IV, 387 から借りて来ている。<sup>(15)</sup>

謎めいた比喩もある。光り輝く岩山が至福の地をよそおって人をたぶらかす。

「……というのはその岩山は光り輝き、人を欺くようなあの光に包まれて、到着はしていてもまだ入港していない碇泊地であるかのような外観を呈して、至福な土地そのものに対する彼らの願望を満たすことを約束するばかりでなく、さらに多くの場合、その港からさえも人々を自分のほうに誘い寄せ……」<sup>(16)</sup> *De Beata Vita*, 3.

この箇所の背後にも *Aeneis*, VI, 604-641 が控えている。<sup>(17)</sup> それにしてもこの輝く島とは何を指すのか。マニ教、新アカデミア派、新プラトン派といった教説のいずれかを指すのか。むしろ真理に近付きつつあるときのおれの影におののいているのではないか。今はしかし断定できない。

幾何学的図形が比喩の今一つの系列に属する。

「まことに、このように自分自身に立ち帰った魂こそが宇宙の美が何であるかを理解するのです。この宇宙という名は明らかに一という語から由来しています。こういうわけですから多くのものに向って進み、強欲なために貧しさに追隨している魂には、この美を見ることは許されません。…たとえば円において——たとえそれがどんなに大きい円であっても——すべての線がそこへ集まる中心はただ一つであって、幾何学者たちはそれを「中心点」と呼んでいます。……これに対して、もしあなたが、この中心からどんな部分へでも進み行こうとされるならば……かえって全体が見失われるのです」。<sup>(18)</sup> *De Ordine* I, 2, 3.

こういう比喩をプロティノスの *Enneades*, IV, 9, 8 から借りている。<sup>(19)</sup>

詩から借りるにせよ、幾何学に供給を仰ぐにせよ、こうした比喩的表現は、自己と世界を映し出すための鏡像の役割を果している。このような比喩を「表わす比喩」(表現的比喩)と名付け、386-7年のカッシキアム期

にあてはめ、388-9年以降中期に及ぶ「指し示す比喩」(象徴的比喩)と区別することにしよう。私はこの鮮やかな区別を「表現においては特に同一性の契機を、象徴においては特に他者性の契機を強調」する、とした波多野精一<sup>(20)</sup>に学び、負っている。

### 3 比喩を超えるもの

ミラノにおいてアウグスティヌスは自己を超える光を見、光に照らされて「不変なもの」を見た。オステシアにおいては「御許にある生命の泉」と呼ばれ、光と呼ばれない。「そこにおいて生命は知恵であり」とも言われ<sup>(21)</sup>る。一体「光」や「泉」は比喩であろうか。かつて『中世思想研究2』(1959年)において私はミラノのヴィジョンを論じ、

「比量知的概念による表現を超越する内容をあえて語ろうとするとき、ひとは比喩的表現に托しはせぬであろうか」。<sup>(22)</sup>  
と述べた。しかし今、*Retractationes*を記した古人にならって再び問い直さねばならない。

「それ(不変の光)は誰の肉眼によっても見られるあの普通の光ではなく、それと同類だがそれより大きく、遥かに明るく輝き、その明るさですべてのものを満たすような光でもありませんでした。その光はそのようなものではなく別のもの、それらの光とは全く別のもの<sup>(23)</sup>でした。……」  
*Conf. VII, 10, 16.*

光はここで比喩ではない。隠喩として非物質的事実に適用せられた物質的イマージュではない。

「そして神ご自身がただひとり、それを通じてではなくご自身が語り、そのことばを私たちが、肉の舌を通じてでも、天使の声をとおしてでも、雲のひびきをとおしてでも、謎めいたたとえをとおしてでもなく、これらにおいて愛したてまつる神ご自身をこれらによらずに聞くとき…<sup>(24)</sup>  
…ただ一つの直観に見る者の心がうばわれ……」*Conf. IX, 10, 25.*

それは比量知的知を超えるが、比喩的知をも超える。

アウグスティヌスはオステシアにおいて、新プラトン主義の高峰をもはるかに超絶する境位にまで辿りついた。

「そこに霊の初穂を結わえのこして」<sup>(25)</sup> *Conf. IX, 10, 25.*

けれどもここで転回が始まる。傲慢を離れ、あわれみを時間の中で悟るために、*Verbum* に辿り着くために *verba* の解釈への迂路が堅められる。*verba* は比喩という場における解釈によって読みとかれて *verba* の背後にひかえる *Verbum* へと赴かねばならないのである。

#### 4 指し示す比喩へ

それでは「指し示す」比喩的思惟は何時、いかにしてアウグスティヌスの心に生まれたのであろうか。378-387年がその時期である。

それには二つの動機が考えられる。一つには言語哲学的関心と、今一つには聖書学、むしろ言語神学的な関心からことば、一層普遍的に *signum* への反省が深められたことに由来する。この二つの領域の境界線で「指し示す」比喩への解釈学的反省が生れる。*De Magistro, 36* で言う。

「ことばのもつ力とは、たとえ私が多くの事をことばに帰するとしても、事物を探求するように、我々にすすめることにすぎないのであって、これらのものを知るように示してくれるわけではない」<sup>(26)</sup>。

ことばは *res* の城門へとわれわれを促すとしても *res* の城門を開きはしない。それは *Veritas* みずからが開き、教える。アウグスティヌスにとっては *res* に関心が寄せられたので、その点で息子のアデオダトゥスとの間に微妙なズレが見られる。

「それでは表示される事物は記号よりも高く評価されるべきであることをお前はそろそろ理解してくれてもよいと思う」<sup>(27)</sup>。

当然同意が得られると思いきや、案に相違して汚物も *res* の一つなのだからという例をとりあげて父をやりこめてしまう。このことはアデオダト

ゥスにとって res とは物体を意味したのに対し、アウグスティヌスにおいてむしろ非体的な intelligibilia を指しておいたこと、ストア的言語哲学と新プラトンの言語哲学の相違に帰着する点で興味深い。

387年に書かれたとされ最近アウグスティヌスの真正の著作の一つに数えることが多くなった *De Dialectica* はアウグスティヌスの言語哲学を覗かせる貴重な小品と言える。<sup>(28)</sup>かれはここで verbum, dicibile, dictio, res の四分法に従っている。それはストア派の言語体系 σημαίνον; σημαίνόμενον; τυγχάνον にあたる。即ち verbum とは vox 音声であり、われわれが発語に先立って verbum を心に浮べるとき、それは dicibilia であるが、それが発語されると diciones となる。指示対象が res である。

用語としてはストア派から借りている。しかしここでも相異に留意すべきである。ストア派において verbum は interpretes mentis と呼ばれ verbum (φώνη) は φῶς νοῦ を意味し意味論的力をもっているが、アウグスティヌスは意味論的力を賦与していない。

*De Magistro* と *De Dialectica* とに共通することは記号論と意味論の二つの場が含まれていることである。比喩はこの二つの場の前提に現前するので、これらの考察は基本となる。<sup>(29)</sup>

388年の *De Genesi contra Manichaeos*, II においては聖書学をふまえて一層比喩の領域に接近するが、それは言語哲学というよりも言語神学的考察となっている。

「罪を犯す前には……(神は)大地を内なる泉によって潤していた。そしてその叡智 intellectus でもって語られた。だから雲から雨を把えるように、<sup>(30)</sup>外的なる言葉を受け取っていたわけではなかった」。

しかし罪を犯した後、

「大地の乾燥のために、我らの主は、肉という雲を身にまとい、聖なる福音という雨をしとどに注がれたから」。<sup>(31)</sup>

ここでアレゴリアが登場する。



「アレゴリアの晦渋ささえがそれに加わるとき、霧のように立ちこめて雲のようになる。それが解釈することによってしぼり出されるとき、いわばよく理解する者たちのために、真理の雨のように注がれる」<sup>(32)</sup>。

原罪以前、人は直観によって直接に Verbum を受けとり理解することができた。キリストの受肉によって我々は Verbum を理解する手掛りとして福音という人間の分節的言語によるテキストを与えられた。それはアレゴリアの謎を秘めているから、解釈することによって真理の雨を絞り出さねばならない、と言われる。tractando exprimere. 比喩はそれ故解釈の特権的な場となる。

## 5 指し示す比喩

「ところで書かれたものが理解できないのは次の二つの理由によってである。意味の不明な記号によるか、どちらにもとれる記号によって意味が隠されていること<sup>(33)</sup>によってである」。

意味不明の記号 ignota signa によってか、両義的な記号 signa ambigua によって分らないところが生ずる。

「ところで記号は本来的であるか、転義的であるかのいずれかである」<sup>(34)</sup>。まず本来的な記号 signum proprium とは、

「ある記号が定められている通りの事柄を示すために用いられるとき、その記号は本来的と呼ばれる」<sup>(35)</sup>。

ところが転義的記号 signum translatum とは、

「文字通りの語によって表わしているあるものを、それ以外のものを示すために用いるとき、それは転義的である」<sup>(36)</sup>。

例えば「脱殻している牛のくつごをにかけてはならない」と申命記25.2で言われているとき、この場合の牛は福音史家を指すのであるから転義的に用いられたことになる。

*De Doctrina Christiana*, III, 5, 9 は以上の用意をふまえた上で次の

ように言う。

「けれどもこれから語る積りの、転義された語に由来するあいまいさは、並々でない注意深さと練達をもって扱わねばならない。というのは、なによりもまさきに、比喩的な言い廻し (*figurata locutionem*) を文字通りに受けとらないように心すべきだからである。まさにこの故にこそ使徒は『儀文は殺す。されど霊は活す』と言っているのである。たしかに比喩的 *figurate* に述べられたことをあたかも文字通りに言われたかのように解するとしたら、肉的に味わっていること (理解していること) になる」<sup>(37)</sup>。

ここには象徴の神学が語られている。それはさきの言語哲学と言語神学を前提としてであるが、一層深められている。比喩のとり違えは、単なる対象理解の知的作業でなく、主体の実存の在り方に深くかかわる、肉的な倒錯を示すとまで言われている。

「結局、しるしをことがらととりちがえるということは、靈魂のみじめな隷属の姿を示すものだ。とこしえの光を呑むことができるために、精神の目をつくられた形体界よりも上にあげることができない」<sup>(38)</sup>。

ここで比喩は単に自己の鏡像ではない。自己の目を、形体界よりも高くあげて、光を呑むことに向う。それは *res* をさし示す。指し示す比喩として象徴性をもっている。referre ad.

とこしえの光を呑むために *ad hauriendum aeternum luminum* という表現は、ミラノの光を見ると、オスティアの生命の泉を呑むを重ねている。比喩の場の解釈は、直観の場に進み出るための、超脱の第一次段階にすぎない。恰も飛行機が大空に舞い上るために、長い滑走路を滑走しなければならないのに似ているように思われる。

さきにここには象徴の神学が語られている、と言った。それだけでなく象徴の救済史も語られている。

「このように奴隷状態と言っても、ユダヤ民族においては、他の民族の

習慣とはるかに隔っていた。……そして霊に属する事柄のしるしを、霊的な事柄の代りに、それが本来何を指示しているのかも知らずに墨守していたのであるけれども、このような奴隷状態によって、彼らが見たことのない万有の唯一の神によるこぼれているものと思いきこんでいた<sup>(39)</sup>」。

異教徒とはちがって、res に辿りつきはしないとしてもユダヤ人たちは有益なしるしを用いてきたのであり、家庭教師の下にある子供のようにみなすことができるとして、一概に拒けていないのである。

## 6 比喩の形而上学

「たしかに文字に捉われる人は、転義されたことばを文字通りのものと思いきみ、本来のことばで指し示していることを、他の意味（指示対象 *aliam significationem*）と関係づけない。そしてたとえば安息日と言うことばを聞くと、たえず循環してくりかえされてやってくる七日の中の一日のこととしか理解しないし、ぎせいということばを聞いても、ぎせいの家畜や地の産物についてふつう行なわれること以上に、超えて考えることがない<sup>(40)</sup>」。

*non excedit cogitatione* 思索によって日常的地平を超えない、と言われる。逆に言うと、比喩を解くとは、日常的世界のスイッチをきることとして *epochē* の意味をもつ現象学的還元である、とも言える。

それはさらに時間的世界から無時間的世界への形而上学的超脱を意味する。

*Ep. 55, 21* はアウグスティヌスの比喩の形而上学観を窺わせる書簡であるので長文であるがここに訳し紹介しよう。この書簡はヤヌアリウスに宛てられ、400年に書かれた。400年といえばまさに *Confessiones* が書かれ、*De Doctrina Christiana* が397年にその一部、主要な部分が完成している。

「比喩の形で *figurate* 暗示されるこうしたすべては、ところで、愛の火を保ち、なんらかの仕方で燐をかきたてるためのものに他ならないの

です。愛のいわば重みでもってわれわれは上方へ或いは内面へもたらされ休息へと向うのです。このような比喻によって暗示されたものは、いかなる秘義の比喩的表現をももちいずに *sine ullis sacramentorum similitudinibus* 裸のまま呈示される場合よりも一層心を動かし、愛を燃やさせます。こうしたことがなぜ生じるのか、それを説明するのはむずかしいのです。けれども、きわめて明瞭に本来的なことばで *verbis propriis* のべられるよりも、あることが、隠喩的な意味表示によって *per allegoricam significationem* 暗示された場合、より感動をひき起し、より魅惑的であり、より高貴な印象を与えるということも争えない事実があります。魂の運動というものは、まだ地上の事物にからまれている間はなかなか燃えつきがおそいのだと思います。でもまず物的な比喻へと *ad similitudines corporales* 魂が運ばれてから、次に、その物的な比喻が描いていた霊的な世界へと *ad spiritalia* 連れ戻されるならば、いわば移植された場合のように生気をとりもどし、あたかも炬火をふりまわしたようにめらめらと燃え上り、愛を激しく燃やして、奪うようにして連れ去られ、やがて憩いに達するのです<sup>(41)</sup>。

これほど比喻の形而上学を簡潔に描き上げている文はすくないであろう。

「メタフォルクはメタフィジクの内側にしか存在しない」<sup>(42)</sup>

というハイデガーのアダージュをここでわれわれも想起してよいのかも知れない。まさに物的な比喻に導びかれ、不可視の場所へと魂が移行する *transitus* とするならば。人はここにおいて西欧形而上学の伝統の声を聴き取るであろう。たしかにアウグスティヌス形而上学における新プラトン主義の優位を確認するであろう。Cornelius Petrus Meyer は *Die Zeichen in der geistigen Entwicklung und in der Theologie Augustins*, II. Teil: *Die antimanichäische Epoche*, 1974 においてアウグスティヌスの記号論における新プラトン主義的存在論の図式 *mutabile-inmutabile* の優位を指摘した<sup>(43)</sup>。それは正当な指摘であった。しかし次に問わねばならな

いのはアウグスティヌスの比喩の形而上学は、新プラトン主義に帰着するのであろうか、という問題である。

## 7 regula の階層

*De Doctrina Christiana* においてアウグスティヌスは解釈学の課題に取組み、解釈学の方法を述べた。そこでさまざまな位相と局面で解釈学の規則にふれている。regula の諸相を階層的に位置づけた上で、その根本的な意義を問うことにしよう。まずそれは技術的積義学の場所であり、下位に位置する。その上により 普遍的な 解釈学の規則として regula fidei, regula dilectionis, regula veritatis が定位する円錐体を思い浮べることができよう。

*De Doctrina Christiana* において regula はすくなくも37回、regularis は1度、regulariter は2度使われている。下位の regula は31回、とくにテュコニウスの *Regulae* の七箇条はかれの興味をつないだが、いささか煩瑣で、へきえきしている趣きもある。regula fidei は4回、regula (dilectionis … caritatis) は2回、regula veritatis は1回登場する。

P. C. Meyer はアウグスティヌスが regula dilectionis と名付ける解釈の原理は regula veritatis と実際には同じものと考えた、と見ている。さらに「regula veritatis と regula dilectionis は regula fidei に対して maßgebend であるが、解釈学の道具(下位の規則)をあてはめる際には、<sup>(44)</sup> 後者は normativ である」としている。この後半については賛成である。つねに規則の適用に当って、聖書のカノン、信条、教会の多数意見を省みることによって健全な意見を求めていったことを想起すれば当然である。しかし、regula dilectionis と regula veritatis は実際上同一視されるであらうか。

regula veritatis とは何か。 *De Doctrina Christiana*, I, 8, 8 によると、

「かのもの（変化を蒙ることなきえい知）が〔この可変的な生命〕より卓越したものであると告げるさいの根拠となる *regula veritatis*（真理の尺度）そのものが変ることなきものであることを、人々は見、しかもこの真理の尺度は、己れの本性よりも上位の境位以外のどこにもないことを見るのである。しかも人々は自分たちは移ろうものであることを見て知るのであるけれども<sup>(45)</sup>」。

*regula veritatis* とは価値判断の根拠に 他ならない。このような判断の根拠がアプリオリに具わっている。それは確実な明証をもっている。*regula dilectionis* とは何か。

「この愛のおきて *regula dilectionis*（マタイ伝、22, 37-39 の神と隣人への愛のいましめ）は神によって定められた<sup>(46)</sup>」。 *De Doctrina Christiana*, I, 22, 21.

さらに *De Doctrina Christiana*, III, 25, 23 によれば、

「このように、邪欲 *cupiditas* の専制的支配が倒れた暁には、神を神のために、自己と隣人を神のために愛せよとのおきて *legibus dilectionibus* によって聖なる愛 *caritas* が義しさのきわみをもって君臨するにいたる。だから、比喩的表現に対しては次のような規則を守るべきである。人が読むものを永い間入念な考察によって吟味したあげくに、解釈<sup>(47)</sup> (*interpretatio*) が聖なる愛の支配にいたるべきである」。

アウグスティヌスの聖書解釈はこの一点にかかり、この一点をめぐり、この一点に帰るといっても過言でない。聖書のどこを叩いてもこの黄金律が響いているし、もしそれがきこえてこないとしたら、聖書がまだ読めていない、というのがその基本原則である。しかし人は言うでもあろう。始めから黄金律が判っているならわざわざ、解釈の迂路をとるに及ばない。そこに解釈の循環がないか、と。しかし解釈はアウグスティヌスにおいて単に客観的に事実を分析・析出する知的作業ではなかったのである。すでに筆者は『*De Doctrina Christiana*, (II, vii, 9-12) における迂路について』

1985年においてこのことを述べた。「知識は悲しむ人に相応しい」と *De Sermone Domini in Monte*, I, 4, 11 で言われる scientia を構造主義のレベルで推測してはならない。

それでは *regula veritatis* と *regula dilectionis* とはどのような位相差をもつのであろうか。

\*

*Legunt, eligunt et diligunt; Conf. XIII, 15, 18.*

彼ら（天使）は読み、えらび、愛する。山田晶は「彼らは読むと同時にえらび、愛します」と意味深い解釈をこめて訳している。（下線筆者）

……, qui non opus habent suspicere firmamentum hoc et legendo cognoscere uerbum tuum. *Conf. XIII, 15, 18.*

彼ら（天使）はこの天空を仰ぎ見たり、読むことによってあなたのみことばを知る必要がない、と言われるときのこの天空（*firmamentum hoc*）とは聖書のことである。

「この民は、天空をながめ読むことによってみことばを知る必要がありません」。

*Vident enim faciem tuam semper et ibi legunt sine syllabis temporum, quid velit aeterna voluntas tua. Conf. XIII, 15, 18.*

「いつも御顔をながめ、永遠の意志が何を欲してられるかを、時間的音節を要せずにそこに読むのです」。

天使にとっては、読むといっても、時間的音節を必要としない。 *sine syllabis temporum*. 「読むと同時に」とパラフレーズされた根拠がここにある。

それでは「えらぶ」(*eligunt*) とは何か。選択し判断することである。可変的なものよりも、不易のものを、よりよきものとしてえらぶこと、それは価値判断に他ならない。それでは人間の場合判断はいかにしてなされるか。テキストを読む行為にあたって多くの解釈が可能な場合、人はどう

するであろうか。

Sine me itaque breuius in eis confiteri tibi et *eligere unum aliquid* quod tu inspiraueris uerum, certum et bonum. *Conf.* XII, 32, 43.

「それゆえ、これらのことがらについて、短くあなたに告白することを許したまえ。そしてあなたが靈感をもって真であり確実であり善であると教えたもうた一つの解釈をえらぶこと許したまえ」。

*eligere unum aliquid* とは何か。

テキストを読むとは情報の海に溺れることではない。真であり、確実であり、善いものをえらびとる、ある一つのものを選択判断する行為のことである。このある一つのものを選び判定することが解釈である。

「真理は解釈からに他ならず、解釈は真理による」。

と Luigi Pareyson が言うように、解釈は真理と相関する。<sup>(49)</sup> 真をえらびとるために、判断の根拠に遡らなければならない。regula veritatis に照射されて始めて、正しい判断が可能になる。

「じっさい、天上のそれであれ、物体の美しさを評価するのは何によるのであろうか、可変的なものについて、『これはこうあるべきだ、それはそうあるべきでない』と正しい言明や判断ができるのは、自分のうちに何がそなわっているからであらうか、このような判断をくだす場合、何にもとづいてするのかとたずねてみて、可変的な自分の精神の上に、不変で真実で永遠の真理を見いだしたのです」。<sup>(50)</sup> *Conf.* VII, 17, 23.

比喩の時間的な外衣に包まれた超時間的な内容を取り出す解釈という作業の根底には、いつも mutabile-inmutabile の新プラトン主義形而上学が横たわる。<sup>(51)</sup> regula veritatis がこのさい解釈の源泉をなしている。

diligunt. 天使は何を愛するのであろうか。

Eligendo enim et diligendo legunt ipsam incommutabilitatem consilii tui. *Conf.* XIII, 15, 18.

「彼らはあなたの不変の<sup>おぼ</sup>思し<sup>め</sup>召しを、えらび愛しながら読むのです」。



それでは不変の思し召しとは何か。それは、神ご自身である、と言われる。

quia tu ipse illis hoc es et es in aeternum, … *Conf.* XIII, 15, 18.

「彼ら（天使）にとっては、あなたご自身がその本であり、しかも永遠にましますから」

それでは人はどうするのか。

「ところで私は、われわれがみな聖書のことばのうちに真理を見、それを語っていることをみとめますが、それにしてもお互に愛しあおうではないか。また、われらの神なるあなたを、ひとしく愛そうではないか。」

sed omnes, quos in eis uerbis uera cernere ac dicere fateor, diligamus nos inuicem pariterque diligamus te, deum nostrum, ……  
*Conf.* XII, 30, 41.

真なるものどもをみとめ、語り、互に愛し、汝なる神を愛そうではないか。天使との重大な差異は、互に愛し合おうといわれている点にある。隣人という目に見える他者を愛することによって神という目に見えぬ方を愛する。ここにおいて新プラトン主義を超えている。聖書解釈の上位の規則はだから *regula dilectionis* である。

「彼（モーセ）がいちばん心にかけていたのは、これらのことの中で真理の光に照らし救霊の効果という点からみてもっともたいせつなもの（愛）にほかならなかつたということ<sup>(52)</sup>を信じようではないか。」*Conf.* XII, 30, 41.

*regula dilectionis* は聖書解釈の冠冕である。それでは上位の規則の中で *regula dilectionis* は *regula veritatis* よりも高い位置を占めるのか。そうではない。*regula dilectionis* と *regula veritatis* は実際上同じものであろうか。それでは位相の差異が無視される。位相を異にしつつ、相補性を維持しつつ、規則の階層の冠冕をこの二つの *regula* が占めている。

## 結 論

聖書が裸のことばでなく比喻のことばによって語られるとき、それは精神を時間的世界から解き放つようにと鍛える。比喻という解釈の場、それは exercitatio animi の場である。<sup>(53)(54)</sup>

## 註

- (1) 拙論、「*De Doctrina Christiana*, (II, vii, 9-12)における迂路について」、『立教大学研究報告, 人文科学』, 第44号, 1985, p. 26-44.
- (2) 1985年秋上智大学で行なわれた中世哲学会第34回大会で発表したものに、題を変更し、手を加えた。
- (3) Memor tamen quid maxime uoluerim nec potuerim, ut non figurate sed proprie primitus cuncta intellegentur, ... *De Genesi ad Litteram*, VIII, 2, 5. CSEL. (Œuvres de Saint Augustin 48, B. A. 1972, Desclée de Brouwer, Introduction générale, iv, L'Exégèse "ad Litteram". また Augustinus, *De Spiritu et Littera*, 4, 6 をめぐって金子晴勇, 「ルターとアウグスティヌス—『霊と文字』の受容過程の研究—」, 1983年, 『基督教学研究』6 を参看。
- (4) *De Doctr. Christ.* II, 6, 8. per similitudines libentius quaeque cognosci.
- (5) *De Doctr. Christ.* II, 6, 8. et cum aliqua difficultate quaesita multo gratius inueniri.
- (6) *De Doctr. Christ.* II, 6, 7. Quod totum prouisum esse diuinitus non dubito ad edomandam labore superbiam et intellectum a fastidio reuocandum (renouandum ed. Green, 1963). J. Martin, 1962 版にことわりのない場合従うが G. M. Green, CSEL, 1963 版は時としてより正しい。
- (7) *Recherches Augustiniennes*, vol. I, Paris, 1958, p. 243-286. cf. Jean Pépin, *Mythe et Allégorie*, Paris, 1958.
- (8) Pierre Hadot, *Exercices spirituels et Philosophie antique*, Paris, 1981.
- (9) C. P. Meyer, *Die Zeichen in der geistigen Entwicklung und in der Theologie des Jungen Augustinus*, Würzburg, 1969, S. 104-127. P. Courcelle, *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin*, p. 93-138. Paris, 1968, Nouvelle édition. H. Savon, *Saint Ambroise devant l'Exégèse de Philon le Juif*, tome 1-2, Paris, 1977. 岡部由紀子は「アウグスティヌスの解釈論」, 『美学史論叢』東京大学美学芸術学研究室編, 1983年で「我々はここで(アムブロシウスを通じて)彼(アウグスティヌス)に「読む」ということについての決定的な思想の転換があっ

たとえるものである。」とし「当時既に修辞学の教師であった彼が、比喩的表現に無知であった筈はなく、ここで彼に転回をもたらしたのはむしろ、それを比喩として読むことが「あるべき仕方を読む」ことでもあるとみなすことを導いた、或る新しい観点であった筈だからである。」(p. 109-110) と述べている。

- (10) *Confessiones*, VI, 4, 6. Et tamquam regulam diligentissime commendaret, saepe in popularibus sermonibus suis dicentem Ambrosium laetus audiebam: *Littera occidit, spiritus autem uiuificat.* cum ea, quae ad litteram peruersitatem docere uidebantur, remoto mystico uelamento spiritaliter aperiret, non dicens quod me offenderet, … 以下山田晶訳に従う。CCSL 版。
- (11) *Conf.* VI, 5, 7.; gradatim quidem. *Conf.* V, 14, 24.
- (12) 386-7-8年 *mysterium, imago, similitudo, dissimilitudo, figura, umbra, vestigium, (signum)* などの語が現われる。*Zeichen* I, S. 37.
- (13) *Contra Academicos*, III, 5, 11. *suamque imaginem et quasi speculum quoddam in Proteo illo animadverti oportere, qui traditur eo solere capi quo numine caperetur, investigatoresque ejus nunquam eumdem tenuisse, nisi indice alicuiusmodi numine.* 以下清水正照訳に従う。ed. Benedicti et Mauri.
- (14) *Contra Acad.* III, 6, 13. *Nam et Proteus ille quanta abs te mentis altitudine commemoratus, quanta intentione in optimum philosophiae genus? Proteus enim ille, ut vos adolescentes non penitus poetas a philosophia contemnendos esse videatis, in imaginem veritatis inducitur. Veritatis, inquam, Proteus in carminibus ostentat sustinetque personam, quam obtinere nemo potest, si falsis imaginibus deceptus comprehensionis nodos vel laxaverit vel dimiserit.*
- (15) H. Hagendahl, *Augustine and the Latin Classics*, I, p. 374, 1976, Götheborg.
- (16) *De Beata Vita*, 3. *Nam ita fulget, ita mentiente illa luce vestitur, ut non solum peruenientibus nondumque ingressis incolendum se offerat, et eorum voluntatibus pro ipsa beata terra satisfactorum polliceatur; sed plerumque de ipso portu ad sese homines invitat, …* 清水訳に従う。ed. B. et M.
- (17) H. Hagendahl, *ibid.* I, p. 343. *sedes beatae* について *Largior hic campos aether et lumine vestit purpureo. : D.V. 1,3 ad beatae vitae regionem … illa luce vestitur …*
- (18) *De Ordine*, I, 2, 3. *Ita enim animus sibi redditus, quae sit pulchritudo universitatis intelligit; quae profecto ab uno cognominata est. Idcirco quae illam videre non licet animae quae in multa procedit, sectaturque aviditate pau-*

- periem, quam nescit sola segregatione multitudinis posse vitari. ... Ut enim in circulo quantumvis amplo unum est medium quo cuncta convertunt, quod centrum geometrae vocant... hinc vero in quamlibet partem si egredi velis, eo amittuntur omnia, quo in plurima pergitur: 清水訳に従う。ed. B. et M.
- (19) A. Solignac, *Doxographies et manuels dans la formation philosophique de saint Augustin*, *Rech. Aug. Suppl. I*. Paris p. 403. cf. *Enn.* VI, 5, 5. しかし Meyer はこれに反対して *Enn.* IV, 3, 17 をあげる。Zeichen, I S. 190.
- (20) 波多野精一, 『時と永遠』, 1943年 23頁に「表はず作用(表現)」と「指し示ず作用(象徴)」という区別を見出す。心ゆく区分と思われる。
- (21) S. Poque, *Le Langage symbolique dans la prédication d'Augustin d'Hippone—image héroïques*, tome 1-2. Paris, 1984. この詳細なイマージュの研究は光をメタファーと見ている。
- (22) 拙稿, 「ミラノのヴィジョン」, 46頁。
- (23) *Conf.* VII, 10, 16. ... non hanc uulgarem et conspicuam omni carni nec quasi ex eodem genere grandior erat, tamquam si ista multo multoque clarius claresceret totumque occuparet magnitudine. Non hoc illa erat, sed aliud, aliud ualde ab istis omnibus. 樋笠勝士, 「アウグスティヌスに於ける光の位相」, 『美学』137, 1984年 p. 15-27 はミラノの経験における光を解釈の場において把え, 第七卷第十章と第十七章の位相差を明らかにした優れた研究であるが, その序で「それが比喩的表現として真理と同定されるとしても, 真理と置換することはできない。」(p. 16) と述べている。
- (24) *Conf.* IX, 10, 25. et loquatur ipse solus non per ea, sed per se ipsum, ut audiamus uerbum eius, non per linguam carnis neque per uocem angeli nec per sonitum nubis nec per aenigma similitudinis, sed ipsum, quem in his amamus, ipsum sine his audiamus, ...
- (25) *Conf.* IX, 10, 24. ibi religatas primitias spiritus ...
- (26) *De Magistro*, 36. Hactenus verba valuerunt; quibus ut plurimum tribuam, admonent tantum, ut quaeramus res, non exhibent, ut norimus. CSEL 版。
- (27) *De Magistro*, 25. *Aug.* Proinde intellegas volo res, quae significantur, pluri quam signa esse pendendas; ... 三上茂訳に従った。茂泉昭男訳を参看。K. Kuypers, *Der Zeichen- und Wortbegriff im Denken Augustins*, Amsterdam, 1934.
- (28) Augustine, *De Dialectica*, tr. by D. Jackson, Dordrecht-Boston, 1975. には Jan Pinborg の校訂によるテキストが附せられていて有益である。Jean Pépin, *Saint Augustin et la Dialectique*, the Saint Augustine Lecture 1972, Villanova, 1976. はすくなくとも, 思想内容から見てアウグスティヌスと矛盾しないこと

を綿密に証明して説得的であるが、筆者には文体が乾いていすぎるように思われてなお疑問がなくはない。

- (29) T. Todorov, *Théories du Symbole*, Paris, 1977, 1. La naissance de la sémiotique occidentale—la synthèse augustinienne. ; R. Simone, *Sémiologie augustinienne*, *Semiotica*, 1972, The Hague, VI, I. p. 1-31. は現代の記号学からのアプローチである。アリストテレスと共に、言語哲学、意味論を考へるとき、アウグスティヌスはつねに省みられるべき源泉であろう。
- (30) *De Genesi contra Manichaeos*, II, 5. Ante peccatum, … irrigabat irrigabat eam fonte interiore, loquens in intellectum eius.: ut non extrinsecus verba exciperet tanquam ex supradictis nubibus pluviam. ed. Benedicti et Mauri.
- (31) *De Genesi contra Manichaeos*, II, 6. Nam propter illam Dominus noster nubilum carnis nstrae dignatus est assumere, imbrem sancti Evangelii largissimum infudit, …
- (32) *De Genesi contra Manichaeos*, II, 5. addita etiam obscuritate allego-  
 riarum quasi aliqua caligine obducta, velut nubes fiunt: quae dum tractando exprimuntur, bene intelligentibus tanquam imber veritatis infunditur.
- (33) *De Doctr. Christ.* II, 10, 15. Duabus autem causis non intelleguntur, quae scripta sunt, si aut ignotis aut ambiguis signis obteguntur.
- (34) *De Doctr. Christ.* II, 10, 15. Sunt autem signa uel propria uel translata.
- (35) *De Doctr. Christ.* II, 10, 15. Propria dicuntur, cum his rebus significandis adhibentur, propter quas sunt instituta, …
- (36) *De Doctr. Christ.* II, 10, 15. Translata sunt, cum et ipsae res, quae propriis uerbis significamus, ad aliquid aliud significandum usurpantur, …
- (37) *De Doctr. Christ.* III, 5, 9. Sed uerborum translatorum ambiguitates, de quibus deinceps loquendum est, non mediocrem curam industriamque desiderant. Nam in principio cauendum est, ne figuratam locutionem ad litteram accipias. Et ad hoc enim pertinet, quod ait apostolus: *Littera occidit, spiritus autem uiuificat.* cum autem figurate dictum sic accipitur, tamquam proprie dictum sit, carnaliter sapitur.
- (38) *De Doctr. Christ.* III, 5, 9. Ea demum est miserabilis animae seruitus, signa pro rebus accipere; et supra creaturam corpoream, oculum mentis ad hauriendum aeternum lumen leuare non posse.
- (39) *De Doctr. Christ.* III, 6, 10. Quae tamen seruitus in Iudaeo populo longe a ceterarum gentium more distabat, … Et quamquam signa rerum spirituum pro ipsis rebus obseruarent nescientes, quo referrentur, id tamen insitum

habebant, quod tali seruitute uni omnium, quem non uidebant, placerent deo.

- (40) *De Doctr. Christ.* III, 5, 9. Qui enim sequitur litteram, translata uerba sicut propria tenet neque illud, quod proprio uerbo significatur, refert ad aliam significationem, sed si “sabbatum” audierit uerbi gratia, non intelligit nisi unum diem de septem, qui continuo uolumine repetuntur; et cum audierit “sacrificium”, non excedit cogitatione illud quod fieri de uictimis pecorum terrenisque fructibus solet.
- (41) *Epistola*, LV, ad inquisitionis Januarii, caput XI, 21. ed. B. et M. Ad ipsum autem ignem amoris nutriendum et flatandum (flammandum) quodammodo, quo tanquam pondere sursum uel introrsum referamur ad requiem, ista omnia pertinent quae nobis figurate insinuantur, plus enim movent et accendunt amorem, quam si nuda sine ullis sacramentorum similitudinibus ponerentur. Cuius rei causam difficile est dicere. Sed tamen ita se habet, ut aliquid per allegoricam significationem intimatum plus moveat, plus delectet, plus honoretur, quam si uerbis propriis diceretur apertissime. Credo quod ipse animae motus quamdiu rebus adhuc terrenis implicatur, pigrius inflammatur: si uero feratur ad similitudines corporales, et inde referatur ad spiritalia, quae illis similitudinibus figurantur, ipso quasi transitu vegetatur, et tamquam in facula ignis agitatus accenditur, et ardentiore dilectione rapitur ad quietem. C. P. Meyer, *Die Zeichen in der geistigen Entwicklung und in der Theologie Augustins*, II Teil: Die Manichäische Epoche, Würzburg, 1974, S. 398 ff. この書簡について Meyer によって教えられた。Meyer の signum をめぐる詳細な研究によって、メタファーについて、教示された。
- (42) ポール・リクール著、久米博訳、『生きた隠喩』, 1984. 352頁。
- (43) Meyer, *ibid.*, S. 279-349.
- (44) Meyer, *Zeichen*, II, S. 302; S. 124, S. 294.
- (45) *De Doctr. Christ.* I, 8, 8. Ipsam quippe regulam ueritatis, qua illam clamant esse meliorem, incommutabilem uident nec uspiam nisi supra suam naturam uident, quandoquidem se mutabiles uident.
- (46) *De Doctr. Christ.* I, 22, 21. Haec enim regula dilectionis diuinitus constituta est.
- (47) *De Doctr. Christ.* III, 15, 23. Sic euersa tyrannide cupiditatis caritas regnat iustissimis legibus dilectionis dei propter deum, sui et proximi propter deum. Seruabitur ergo in locutionibus figuratis regula huiusmodi, ut tam diu

uersetur diligenti consideratione quod, legitur, donec ad regnum caritatis interpretatio perducatur.

- (48) *De Sermone Domini in monte*, I, 4, 11. Scientia congruit luentibus.
- (49) Luigi Pareyson, Originalità dell' interpretazione, *Hermeneutik und Dialektik*, II, 1970, Tübingen, S. 352. “della verità non c'è che interpretazione et non c'è interpretazione che della verità”
- (50) Quaerens enim, unde approbarem pulchritudinem corporum siue caelestium et quid mihi praesto esset integre de mutabilibus iudicanti et dicenti: “Hoc ita esse debet, illud non ita”, hoc ergo quaerens, unde iudicarem, cum ita iudicarem, inueneram incommutabilem et ueram ueritatis aeternitatem supra mentem meam commutabilem.
- (51) *Zeichen*, II, S. 114-130. Das ontologische Schema mutabile-inmutabile als Schlüssel des Verstehens für die Zeichenfunktion des Veränderlichen auf das Unveränderliche. の項参看。
- (52) attendissime credamus, quod in eis maxime et luce ueritatis et fruge utilitatis excellit.
- (53) ここでいう exercitatio animi は序説で単に予備的運動として述べたものといかにして区別されるであろうか。理論的にはともかく、実際上は区別されない。曇り上の水練が水中において有効となるように。 *De Doctr. Christ.* II, 7, 10; III, 8, 12; IV, 6, 9.
- (54) 「靈的知解は単に章句を比喩的に解することを指すのではなく」、「字義通りに解さるべき章句が、比喩として解釈さるべき」（岡部由紀子、「signum と知解」前掲70頁）であるということも弁えるべきことである。